
レイトン教授vs相棒～考古学者と特命係のナゾトキ事件簿～

ハーヴェスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイトン教授vs相棒〜考古学者と特命係のナゾトキ事件簿〜

【Nコード】

N5968X

【作者名】

ハーヴェスター

【あらすじ】

ロンドンの考古学者、エルシャール・レイトンから日本の警視庁特命係の杉下右京に手紙が届いた。ロンドンで起きている怪事件の解決を手伝ってほしいと言う依頼に、レイトンと右京の推理が炸裂する。

『全ての始まり』

警視庁、特命係。

仕事は殆ど与えられない窓際部署で、係長の杉下右京と相棒の神戸尊すけの2人は上層部からも嫌われていた。しかし、今までに数多くの事件を解決に導いてきた。

その特命係を目の敵にしている「捜査一課」の伊丹憲一いたみけんいち、芹沢慶二せりざわけいじ、三浦信輔みつらしんすけの3人が話していた。

伊丹

「何？警部とソンが手紙を読んだ？」

芹沢

「ええ。珍しく。」

三浦

「警部殿にも友達が居るんだなあ？」

芹沢

「いるでしょ、警部にも。ソンさんかもしれませんけど。」

一方、特命係の小部屋。

右京と尊が手紙を読み終え、右京は封筒の上に便箋を置いた。

「わが親友 杉下警部へ。」

突然の手紙で驚いているでしょうか？

今回は、杉下警部にお願いがあつて手紙を出しました。今、ロンドンで大事件が起きています。数日前、私が教授を勤めるグレッセンヘラーカレッジの生物学者、ジェームズ・ライトの研究室で事故が

あり、巨大な生物が逃げ出しました。私と助手のレミ、そして友人の子、ルークは外出中で事故には巻き込まれませんでした。が、ロンドンではその生物が住民を混乱に陥れてます。

スコットランドヤードも全力を挙げて捜査中ですが、どうしても、杉下警部の力が必要です。

どうか、手を貸していただけないでしょうか？

エルシャール・レイ

トン」

尊

「生物って、何ですかね？」

右京

「分かりませんねえ。ですが、黙ってみているわけには行きません。」

尊

「では、ロンドンに？」

「よ！ヒマか？」

組織犯罪対策5課長角田六郎^{かくたろくろつ}が入ってきて、いつもどおり勝手にコーヒーサーバーからマグカップにコーヒーを注ぐ。

尊

「ヒマじゃありませんよ、角田課長。」

角田

「え、ヒマじゃない？」

右京

「角田課長、突然ですが、しばらく特命係を留守にします。」

角田

「どうしちゃったのよ？」

右京

「ロンドンに発つ事になりました。」

角田

「ロンドン!？」

右京と尊が事情を説明し、角田もコーヒを飲んで落ち着いた。

角田

「そりゃ大変だな。なんなら、ウチの小松と大木を同行させようか？」

右京

「いえ、大丈夫です。必要になったら、お願いできますか？」

角田

「もちろん!いつでも言ってくれ。」

右京

「ありがとうございます。では神戸君、準備をしましょう。」

尊

「はい。」

特命係の小部屋を出て行く2人を、角田はコーヒを飲みながら手を振って見送った。

『ロンドンへ』

翌日の午後23時。

東京国際空港には、特命係の他に各田課長ら組織犯罪対策部対策5課の面々、トリオ・ザ・捜一、そして鑑識課員米沢守よねざわまもるの姿があった。

昨日の夜、特命係がロンドンへ発つ事知った内村完爾うちむらかんじ刑事部長と中な園照生参事官は、トリオ・ザ・捜一を刑事部長室に呼び出した。
かそのてるお

伊丹

「ロンドンにですか？」

内村

「ああ。スコットランドヤードの友人から依頼されてな。」

三浦

「どういう事件ですか？」

中園

「グレッセンヘラーカレッジと言う大学の生物学者が何者かに殺害され、研究室も爆破されてな、その学者が生み出した生物が逃げ出し、ロンドン市民を襲っているらしい。」

内村

「念のため、組織犯罪対策5課もロンドンに派遣する。テロ組織の犯行かもしれない。…それと、特命係もロンドンへ行くようだ。」

三浦

「変人警部殿も？」

内村

「ああ。さつき米沢が訪ねて来てな、同行したいと言いだした。」

伊丹

「あいつは特命の手下かよ。」

芹沢

「伊丹先輩の手下でもありますけどね。」

余計なことを言った芹沢の頭を伊丹がどつく。

内村

「私も反対したんだがな、あいつらは被害者と同じ大学教授から依頼されたそうだ。勝手にしろと言ったら礼を言って出て行った。」

伊丹

「ところで、その逃げ出した生物とは？」

中園

「巨大な毒蛇だ。」

三浦

「毒蛇…ですか。」

内村

「付け加えると雑種のな。2種類のヘビの遺伝子を操作させて造ったらしい。」

芹沢

「じゃあ、危険ですね。」

中園

「すでに数名死亡者も出ている。」

内村

「友人からの依頼を断るわけにいかんからな。なんとしても、特命より先に事件を解決するんだ、分かったか！！」

と言うわけで、捜査一課からは3人、鑑識課から1人、組織犯罪対策5課と特命係は総出でロンドンに向かうことになった。

ロンドン行きの飛行機が離陸し、数分経った。

右京

「皆さん、今回の相手は毒蛇です。くれぐれも気をつけてください。」

伊丹

「子供じゃあるまいし、大丈夫です。」

米沢

「それはそうと警部殿、この記事を見てください。」

右京

「はい？」

右京が覗き込んだ記事は、毒蛇に襲われた被害者の証言の記事だった。

右京

「体長10メートル以上のコブラ……ですか。」

米沢

「はい。コブラは最大級の毒蛇と呼ばれていますが、10メートル近くなるのは、アナコンダやアミメニシキヘビの仲間だけです。」

尊

「コブラの変異体と言う可能性は？」

米沢

「はい、十分に考えられます。」

三浦

「射殺を試みたロンドン市警の巡査が襲われ、2名殉職しています。」

芹沢

「そのうち1名は飲み込まれちゃってますからね。」

角田

「そんなにヤバいの？」

伊丹

「ヤバすぎですよ。」

数時間後、無事ロンドンヒースロー空港に到着し、角田らとトリオ・ザ・捜一はスコットランドヤードに直行し、米沢は何故か空港近くの駅に向かった。

一方、右京は迎えに来ていたシルクハットの紳士と握手をしていた。

レイトン

「杉下警部、お久しぶりですね。」

右京

「ええ、実に久しぶりです。」

手紙を出した依頼人、エルシャール・レイトンが空港に迎えに来ていた。

尊

「初めまして。レイトン教授、私、杉下警部の部下の神戸尊です。」

レイトン

「エルシャール・レイトンです。初めまして、神戸さん。」

レイトンは尊とも握手をした。

レイトン

「では、私の大学に向かいましょうか。」

レイトンは2人を駐車場に向かった。

駐車場には、黄色いコートの女性と青いベレー帽の少年がいた。

レイトン

「紹介します。こちらは私の助手のレミ、そしてこの子は私の友人ルークです。」

レミ

「レミ・アルタワです。お話は伺ってました。お会いできて光栄です。」

ルーク

「ルーク・トライトンです。初めまして！」

右京

「杉下右京です。初めまして。」

尊

「神戸尊です。お会いできて光栄です。」

自己紹介を済ませ、レミの運転する車でグレッセンヘラーカレッジに向かう。

しかし、空港を出て20分経ったところから、道が渋滞し始めた。

レイトン

「かなりの渋滞だな…。」

レミ

「任せてください、教授。杉下さんと神戸さん、しっかり捕まってくださいよ。」

道路は少しの隙間が少し空いている。

レミがアクセルを踏むと、車その隙間をすばやく走り抜けていき、社内はガタガタ揺れ、レイトンはシルクハットのしっぺ抑え、後部座席の窓際の席に座る右京と尊は天井や窓に何度も衝突し、ルークに関しては慣れているのか悲鳴を出さない。

渋滞を抜け、空いている道に出た時、

ルーク

「ちょっとレミさん、危ない運転はやめてください！」

レイトン

「お二人とも大丈夫ですか？」

右京

「ええ…過激な運転テクニックですね…。」

尊

「ヒヤヒヤしましたよ。よく事故を起こしませんでしたね…。」

レミは苦笑いして「すいません」と言った。

しかし、右京は尊の一言に意見を言った。

右京

「神戸君にそういう資格はありませんよ。」

尊

「どういふことですか？」

右京

「君も運転が荒いですからねえ、僕は何度もヒヤヒヤさせられました。」

その一言に、尊は反論した。

尊

「お言葉ですが、杉下さんがあまり車を運転をしないのは、実はかなり下手だからじゃないですか？」

右京

「いいえ、僕はいつも安全運転を心がけています。そういえば安全

運転なのにオービスに引っかけた事がありましたねえ」

尊

「失礼ですが…。」

尊が何度も意見を言うが、右京はその度に尊の運転の荒さを主張する。

ルーク

「たぶんレミさんの方が荒いでしょうけど。」

レミ

「…ルーク、何か言った？」

ルークがつぶやき、レミが少し目を細めた笑顔で振り向く。

ルーク

「え？…あ、いいえ！！レミさんの運転は上手だなあって言いました！」

ルークは必死に笑顔でごまかした。

レミ

「へえ…。」

レミの返事から、ルークはごまかせてないと知った。
その途端、冷や汗をかき始めた。

それから一時間ほど経過し、グレッセンヘラーカレッジに到着した。

講義の最中のため、静まり返った廊下を歩く足音が響き渡る。
シルクハットの絵が描かれている扉を開けた。

研究室の中は、本や化石で埋もれている。

右京と尊はソファに、レイトンはデスクの椅子に座った。

レミはルークと一緒に紅茶を作り始めた。

レイトン

「ジエームズ教授の研究室は2階、現在も警察の現場検証が行われています。彼は爬虫類、特に蛇の研究を行っていました。今回逃げ出したのは、猛毒のコブラと世界最大のヘビ、アナコンダの遺伝子を組み合わせて生み出されたキングアナコンダと呼ばれる物です。」

右京

「コブラとガラガラヘビの遺伝子を組み合わせた毒蛇が人々を襲うと言った映画がありましたけど……。」

レイトン

「それからヒントを得たようです。」

尊

「警官が一人飲み込まれたとか。」

レイトン

「ええ。」

右京

「アナコンダを含むボア科のヘビは獲物に巻きつき、窒息死させてから飲み込みます。コブラの遺伝子を持つヘビなら当然毒ももっているでしょうから、噛まれてしかも巻きつかれたら即死でしょう。」

レイトン

「数名、奇跡的に助かった者もいますが……。」

レミ

「殆どの方はまだ意識が戻らないんです。」

ルークがレイトンと右京、尊にティーカップを差し出した。

右京は紅茶の香りをかぎ、一口飲んだ。

ルーク

「僕が茶葉をブレンドしたんです！」

右京

「ルーク君、とてもおいしいです。」

右京にほめられ、ルークは照れた表情を浮かべた。

すると、誰かが扉をノックした。

レミがドアを開けると、トリオ・ザ・捜一と米沢が入ってきた。

伊丹

「アナタがレイトン教授？」

レイトン

「いかにも、私がエルシャール・レイトンと申しますが？」

右京

「教授、彼らは私の知り合いの伊丹刑事、芹沢刑事、三浦刑事、そして鑑識課の米沢巡査部長です。」

レイトン

「そうですか。こちらは助手のレミと友人の子、ルークです。よろしく願います。」

三浦と芹沢、米沢はよろしく願いますと返した。

伊丹

「早速だが、ジェームズ・ライト教授の研究室を拝見しても？」

レイトン

「え？」

伊丹

「捜査令状はいただいています。」

レミ

「それなら、私が案内いたします。」

伊丹

「あ、はい！よろしくお願いします！」

大げさな敬礼をした伊丹をみて、

レミ

「面白い人。」

と呟いた。

ジェームズ・ライトの研究室はレイトンの研究室より広がった。

研究室は壊れた机や焼け焦げた本が散らばっている。

窓ガラスは砕け散っている。

芹沢

「教授、失礼ですが、ジェームズ氏が研究していた生物や、飼育していた生き物は？」

レイトン

「1階の空いてる研究室に移しています。」

1階のレイトンの研究室の前の研究室は、とても薄暗く、ひんやりとした空気が漂っていた。

そして、天井には太い枝や短い枝が設置され、部屋中に大小様々な水槽があり、中に色々なヘビが入っている。

右京

「爬虫類館のようですね。」

レイトン

「ええ。生徒からはあまり慕われてはいませんでした。」

尊

「人気が無かった、と言うことですか？」

レミ

「夜に良く言い争う声が聞こえてきました。」

ルーク

「僕も、あまり生徒と親しくしているところを見たことはありません。」

そのとき、伊丹が悲鳴を挙げた。

何事かと振り返ると、枝の上からニシキヘビの幼体が伊丹の頭の上に落ちてきたのだ。

伊丹

「びつくりした…。」

伊丹は頭の上のヘビをつかんで目の前に持つてくる。
下を出して痛みを見つめるヘビに、伊丹は黙った。

伊丹

「……可愛い…。」

そんな伊丹をほっといて、一番大きなケージを眺める。
ガラスのプレートに、「King Anaconda」と書かれている。

そして、ケージの扉の鍵は、どう見てもヘビが壊したものではなく、

人間が破壊したものだと一目で分かった。

右京はとぐろを巻いているインドニシキヘビの成体を指差した。

右京

「キングアナコンダはこのニシキヘビより大きいのですか？」

米沢

「目撃証言によると、胴の太さは私の太腿と同じくらいだそうです。因みに、顔の大きさは教授の帽子ほど…。そして体長は10メートル。」

三浦

「そんなにでかいのに良くこんな狭い檻に入れられてたんだな。」

伊丹

「狭いって、高さと幅2メートルのケージだぞ。」

伊丹が先程のニシキヘビの幼体を抱いたまま言った。

三浦

「全長10メートルだぞ。って、気に入ったのかよ。」

芹沢

「子供みたいに扱ってますよ。」

伊丹

「だって、可愛いから…ホラ。」

伊丹が三浦の鼻先にヘビを突き出し、三浦もじっと見つめる。

右京

「伊丹刑事、生き物とはいえ、現場の物を持ち出してはいけませんよ。」

伊丹

「わ、分かってますよ!」

伊丹はふてくされて名残惜しそうに空いている水槽にヘビを戻した。

右京

「スコットランドヤードに行ってみましょうか。」

尊

「そういえば、角田課長たちがいませんね。」

伊丹

「角田課長はスコットランドヤードでコーヒーをご馳走になってましたよ。」

右京

「そうですか。」

尊

「何か手がかりが見つかるといいですね。」

右京と尊はレイトンカー、伊丹らはスコットランドヤードから借りたパトカーに乗ってスコットランドヤードに向かった。

『射殺』

スコットランドヤードへの道を、レイトンカーとパトカーが突っ走る。

レイトンと右京は、『地図』をじっと見つめていた。

話は数分前のグレッセンヘラーカレッジに遡る。

スコットランドヤードに向かうため、大学のロビーまで来ると、「すみません」と呼び止められた。

呼び止めたのは、大学の生徒と思われる青年だった。

ジム

「僕、ジェームズ教授の教え子の、ジム・ロイヤーです。」

レイトン

「どうかしたのかい？」

ジム

「あの、これを…。」

ジムはレイトンに、小さな地図を渡した。

右京

「これは？」

右京と尊が地図を覗き込む。

ジム

「教授の飼っていたヘビが人を襲った場所を記したものです。」

地図のいたるところには、×印と、「9月24日、24歳女性、重症」「9月27日、12歳少年、死亡」等と文字が書かれている。

ジム

「僕が最後に見たときは、6メートル位だったんですが、教授は「成長速度が速い」と言っていました。今までに人や家畜を襲っているから、逃げ出して2週間後には10メートルに成長していたみたいです。」

ジムは悲しそうな表情で俯いた。

ジム

「少なくとも、数年前まではあんな事を考えたりはしませんでした。僕達も、研究を手伝ったり、新種を教授が発見し、世界中に広まった時は皆で喜んだのに…。それが、最近になって人が変わったかのように…。」

右京

「ひとつだけよろしいですか？」

右京が人差し指を立てる。

ジム

「何ですか？」

右京

「あなたは、ジェームズ教授が何故このような生物を生み出そうと

考えたのか、理由を知りませんか？」

ジム

「…学会に発表して、有名になりたいからと言ってました。自分は学会からも嫌われているから、雑種を新種と偽って発表すると…」

尊

「詐欺…と言う事ですか？」

ジム

「はい。いろんな図鑑や本、映画などを見てヒントを得たそうです。僕も反対したんですが、聞いてはもらえませんでした。」

レミ

「なら、警察に動いてもらえば…」

ジム

「そうしようとも思いましたよ。ですが、警察沙汰にする前に馬鹿げた事を考えるのは止めて貰おうと説得しました。しかし聞き入れないで、雑種のヘビを作り上げた。だから警察に訴えようとしたんですが、誰かに教授は殺害され、ヘビも姿を消しました。」

伊丹はレイトンから地図をひったくった。

伊丹

「ご協力ありがとう。」

無愛想に敬礼をすると、伊丹はさっさとロビーから出て行った。

レイトン

「ありがとう。」

ジム

「いえ。僕は彼のやり方は納得できませんが、恩師が生み出した動物が人々を恐怖に陥れているのは嫌です。尊敬している恩師の為に、早く事件が解決する事を祈ってます。」

レイトン達も駐車場に向かい、1人残されたジムは低く呟いた。

ジム

「…僕はあいつの願いをかなえてやったんだ。…僕は悪くない…。」

伊丹

「別に来てもらわなくても結構なんですがね。」

右京

「僕はこの事件を依頼されたものですから。」

レイトン

「だから捜査も手伝ってもらいます。」

伊丹は納得のいかないようだったが、諦めたらしい。低いため息を漏らすと、スコットランドヤードのパトカーに乗り込んだ。

芹沢

「そつえば、米沢さん空港からどこへ行っただんですか？」

米沢

「いえ、別に。ちょっと…。」

米沢は制服のうちポケットから、「陸を走る豪華客船」と呼ばれる超特急、モレントリー急行の切符を取り出した。

鉄道オタクの米沢は、勤務時にも「是非乗りたい」と鑑識課員と話していた。

大きな公園に差し掛かったその時、レイトンカーが急ブレーキをかけて停車し、伊丹達はぶつかりそうになった。

伊丹

「危ないじゃないですか!!」

伊丹は文句を言いながら外に出る。

レイトン

「あれは…。」

ルーク

「グロススキー警部!」

右京

「角田課長もいらつしゃいますね。」

レイトン達の知り合いのグロススキー警部と、日本から持参したパンダのマグカップを片手に深刻な顔をしている角田がいたのだ。

グロススキー

「おう、レイトンとレミか!それにチビも!」

グロススキーが大声で手を振り、ルークは頬を膨らませた。

ルーク

「チビじゃありません!ルークです!!」

角田

「おい、神戸〜!警部殿〜!」

各田も両手を振った。

レミ

「グロスキー警部、どうしたんですか？」

グロスキーと角田の他に、大木と小松をはじめとする組対5課の面々と、スコットランドヤードの巡査とライフルで武装した特殊部隊が待機している。

角田

「いや、例のヘビの化け物をな、誘き出して始末するんだよ。」

レイトンが地図を覗き込む。

レイトン

「やはり、ここでしたか。」

角田

「あの、あんた誰？」

グロスキー

「エルシャール・レイトン！恐ろしく頭の回転が速い俊才です。この2人は私の知り合いのレミと、ルークです。」

レミ

「レミです。」

ルーク

「ルークです！」

角田

「あ、どうぞよろしくお願いします。この2人は私の部下の杉下右京と神戸尊。そして鑑識課の米沢と捜査一課の伊丹、芹沢、三浦。グロスキー

「よろしくお願いします。」

グロスキーと右京は握手を交わした。

角田

「それより教授殿、さっき、「ここでしたか」って言われましたが？」

右京

「この地図です。」

レイトンの地図に全員の視線が集中する。

尊

「大学のロビーで、学生から手渡されました。」

イギリス全域の地図に、円を描くかのように×印が書かれている。

レイトン

「ひとつの円が完成すると、大きな円の中に小さい円が沢山書かれています。そして、円の中央部に位置するのがこの自然公園です。」

グロスキー

「ほう。よく分かったな。」

レイトン

「おそらく、あの青年は我々にヒントを与えてくれたんだと思いますよ。」

右京

「ええ。ただ、ひとつ気になることがあります。あの青年は、何故私達にこの地図を渡したんでしょうか？誰が見ても、次にどこに現れるかは分からない物です。しかし、この地図に仕掛けられていたナゾを解けば、次の事件現場が明らかになります。いえ、単に偶然かもしれませんが、僕は彼が次の悲劇が起こる前に事件を阻止させようとしているようにも見えます。」

レイトン

「あなたも捜していますか？」

右京

「ええ。全ての真実は、事件を終わらせてからにしましょう。」

すでに回りは通行止めになり、一般市民もいなくなった。

公園の木々や噴水などの陰に特殊部隊が隠れ、右京らは車の中で静かに公園を眺める。

誘き出す為の囿である牛は公園の草を食べ、あたりは小鳥の鳴き声が聞こえるだけである。

ビックベンの時計の針が真上で重なり、正午12時になった。

ビックベンが奏でる鐘の音がロンドン中に響き渡り、鐘の音が止むと小鳥の鳴き声も聞こえなくなった時だ。

どこからとも無くシューツと音が聞こえ、巨大な毒蛇、キングアナコンダだ。

レイトン

「これが…。」

右京

「…。」

キングアナコンダは首のフードを広げると、口をあけて大きな牙をむき出した。そしてものすごい速さで牛に噛み付いた。

牛は衝撃で草の上を転げ回り、キングアナコンダの太い胴体が牛に巻きついた。

牛は抵抗もできず、キングアナコンダはゆっくりと牛を締め付ける。

「撃てーーーーー!!!!!!」

怒声が響き、木に隠れていた特殊部隊員がいつせいに発砲する。

弾丸がキングアナコンダの心臓と頭を打ち抜いた。

数百発の弾丸がキングアナコンダの巨体に打ち込まれ、やがてぐったりと動かなくなった。

伊丹

「やったか!？」

右京たちは動かなくなったキングアナコンダに近寄った。

打たれた箇所からは血が流れ出し、銃で突いても動かない。

それだけじゃない、全長10メートルと聞いていたが、10メートルとは思えない。

100メートルは超えている。

大木と小松がそのヘビの全長を調べる。

大木

「ひゃ…130メートル!!」

大木が震える声で叫び、特殊部隊や巡査の間でざわめきが起こる。

グロスキー

「一件落着だな…。」

レイトン

「いいえ、まだ我々にはする事が残っています。」

レイトンが呟いた。

右京

「まだ。真犯人逮捕と言う目的が残っています。」

角田

「いやいやいや、真犯人も何も、犯人はこいつだろ？」

角田がキングアナコンダを爪先で軽く蹴った。

レイトン

「いいえ。このヘビは、研究室の事故で逃げ出したものではありません。」

その場にいたレイトンと右京以外全員が啞然とした。

右京

「早ければ今日中に、犯人をスコットランドヤードに引き渡すことができます。」

『射殺』(後書き)

『真犯人』

自然公園には、人だかりができている。

その中には、ジムもいた。

右京とレイトンが人だかりの中央に進み出る。

右京

「イギリス中を騒がせ、人々を恐怖に陥れた毒蛇脱走事件…。」

レイトン

「その犯人が分かりました。」

その一言で公園中が騒がしくなる。

右京

「そして、ここにいる皆様の前で、その犯人を名指ししましょう。」

ジムは落ち着かない様子だった。

右京

「犯人は、イギリスを混乱させるために毒蛇を逃がしたのではありません。」

伊丹

「どういうことですか？」

レイトン

「犯人は恨みを持っていたジェームズ・ライト教授を殺害すると同時に、ジェームズ教授の作り上げた毒蛇をイギリスの人々に知ってもらいたかったんです。」

三浦

「いい加減種明かしをしてもらえませんか？」

右京

「そうですねえ。」

レイトンと右京の瞳がキラリと輝く。

右京

「この事件の首謀者で…。」

レイトン

「被害者を恨みながらも心の奥底では尊敬していた人物…。」

レイトン & 右京

「それはあなただ!!」

レイトンと右京が指差したのは、ジムだった。

人々がどよめく。

ジム

「…僕が犯人だとおっしゃるんですか？」

レイトン

「ええ。あなたです。」

ジム

「僕が首謀者なら、何であなた達に地図を渡すんですか？犯人が手がかりを渡したりしませんよ。」

右京

「それはごもつとものです。しかし、あなたが犯人だからこそ、地図を渡した理由があるのですよ。」

ジム

「!？」

右京

「あなたはジエームズ博士を殺害し、毒蛇を脱走に見せかけて持ち出した。あなたはジエームズ教授を恨みながらも、教授の作った物を広めたかったのでしょうか。」

レイトン

「だが、ヘビは凶暴化して人々を遅い、ついには人を飲み込める程の大きさになった。怖くなったあなたは、地図を私かスコットランドヤードの関係者に渡すつもりだったんでしょう?」

ジム

「……証拠は?」

レイトン

「証拠?」

ジム

「僕が犯人である証拠です。」

右京

「米沢さん。」

米沢

「はい。実は、今回射殺した毒蛇の檻には、ジエームズライト教授と、もうひとつナゾの指紋が検出されました。」

右京

「どうです?あなたの指紋とここで照合してみませんか?」

レイトン

「あなたが無罪だと主張しきれぬのなら、できるでしょう?」

神戸

「それと、もうひとつ。グレッセンヘーカレッジの爆発事故の直後、麻袋を抱えたあなたを目撃したという人がいました。」

芹沢

「大学のロビーの監視カメラにもばっちり写っていましたよ。休日でもいませんが、カメラは作動していましたからね。」

ジム

「…。」

レイトン

「答えは出たようですね。」

右京

「そろそろ、教えてもらえますか？」

ジム

「…はい。」

事件前日の夜。

ジム

「考え直してください！」

ジェームズ

「うるさい！！お前の意見なんか聞かない！！」

ジム

「雑種の生物を新種と偽って公表したら、あなたの一生の汚点になるんですよ！」

ジェームズ

「だまれ！！」

ジェームズとジムの激しく言い争う声が、大学中に響く。

結局ジェームズはジムの忠告を聞こうとはしなかった。

翌日、ジェームズは講義の無いのを良い事に、フィッシュ・アンド・チップスをた食べ、ビールを飲みながら論文を書いていた。

その姿を、大学の横の路地に隠れているジムにもよく見えた。そして、研究室の窓に裏ルートを通じて入手した手榴弾を投げ込む！

ガラスを突き破って研究室の床に転げ落ちた手榴弾は、ジェームズが爆弾だと気付く前に爆発した。

真つ赤な炎が研究室から噴き出した。

講義の無い日だから生徒はいない。

レイトンや他の教授達も今日は自宅に帰っている。

ジムは燃え盛る研究室に飛び込むと電動カッターでキングアナコンダの入っている折の金網を切断すると、とぐろを巻いて寝ていたキングアナコンダを麻袋につめて大学を後にした。

右京

「あなたはその時、ヘビを逃がしてこうなることになると思わなかったのですか？」

ジム

「成功の為には手段を問わない。…ジェームズ教授の教えです。それを守ってやったんです。」

伊丹

「おい、ふざけんじゃねえ…。」

伊丹がジムに掴み掛かる前に右京の堪忍袋の緒は音を立てて切れた。

右京

「まだ分からないのですか…！」

公園中が静まり返る。

レミとルーク、グロスキーやスコットランドヤードの巡査達は啞然

とし、ジムはビクツと震え上がった。

右京

「ジエームズ教授を殺さずにヘビを新種と偽らずに人々に知って貰う方法はあったんです！あなたのやった事がイギリス中の人々にどんな恐怖を与えたと思いますか！！いい加減恥を知らないツ！」

右京の激昂に、ジムは俯いて涙を流し始めた。

神戸

「あのヘビを動物園や博物館に寄付しても、ジエームズ教授の願いはかねられたんです。ジエームズ教授を殺さないでも、警察に身柄を渡しておけば、あなたは殺人犯にならずに済んだ。」

ジム

「うう…うう…！！」

グロスキー

「行くぞ。」

グロスキーはゆっくりと手錠をジムの両手にかけた。

サイレンが鳴り響き、パトカーはスコットランドヤードに向けて発信した。

レミ

「ああびっくりした。怒ったらすごく怖いんですね。」

右京

「人は誰でも怒れば怖いんですよ。」

右京はいつもと同じ穏やかな口調に戻っていた。

ルーク

「それも怖いんですけど。」

ルークがボソツと呟いたが、右京には聞こえなかったようだ。

『目覚めの朝、衝撃のニュース』

レイトンは翌日のロンドン学会での講演のためにルークとレミをつれて大学に戻り、右京達警視庁御一行はレイトンの手配したランクの高いホテルに向かった。

トリオ・ザ・捜一と米沢は飲み比べ、組対5課の連中は大宴会（かなりのお祭り騒ぎだったが、防音の部屋だったので苦情は来なかった）で盛り上がった。

翌日、右京と尊、米沢は朝食を食べていた。

『ロンドンで相次ぐ子供誘拐事件。犯人はいまだ不明』

大きな文字でロンドンタイムズの一面を飾っていたのは、日本でも報道されている連続誘拐事件だ。

右京

「ほう…スコットランドヤードを挑発するかのような犯行予告…。興味を惹かれますねえ。」

尊

「犯行予告で指定した場所で、警察が警備をしている中誘拐を成功させたんですね。」

右京

「ええ。」

「おはよ。」

ドアが開いて可愛らしい声が聞こえた。

振り返ると、そこにいたのは小動物…ではなく角田だった。
日本から持参したと思えるパンダの寝巻き姿で。

尊

「そのパジャマで寝てるんですか…？」

角田

「息子とかみさんが誕生日にプレゼントしてくれたんだよ。」

右京

「ほう…。」

米沢

「ところで、我々の部屋に、何の用でしょう？」

角田

「ああ。それがさあ、モーニングコーヒーが飲みたかったんだけど
紅茶しか出ないんだよ。」

右京

「頼めば出してくれるのでは？」

角田

「頼んだんだけどさ、コーヒー豆切らしてないんだって。」

尊

「それでご用件は？」

角田が口を尖らせる。

角田

「愚痴を聞いてもらいに来たんだよ、大木と小松も「朝から課長の
愚痴は聞きたくありません」だってさ。」

右京

「それは僕達も同じですよ。」

米沢

「それだけでは無いでしょう?」

米沢が断言した。

米沢

「察するに、どうしてもコーヒーが飲みたいが愚痴も聞いてもらいたい。そこで思いついたのは特命係のお二人。しかし問題は、日本からコーヒーセットを持参してきているかどうか分からない。」

角田が黒縁めがねの置くからしげしげと米沢を見る。

角田

「すごいなあ、その通りだよ!」

尊

「コーヒーセットは持ってきてませんよ。」

角田

「なあんだ。警部殿、後で奢って。」

右京

「ホテルを出てすぐ隣にコーヒーショップがありました。お金は後で渡します。」

角田

「いやいや冗談だよ。愚痴を聞いてもらったお礼に何か奢ってやるよ。大木と小松にはあげない。」

右京達が笑っているところに、しわだらけでネクタイを鉢巻のように頭に巻いたトリオ・ザ・捜一が入ってきた。

伊丹

「け、けけ警部殿！！テレビ見てください！」

右京

「どうかしました？」

芹沢

「良いから早く！！」

急かされるままにテレビをつける。

女性キャスターがニュースを読み上げていた。

「東南アジアのサルウィン南部にて、飼育されていたと思われるトラが子供達を襲い、その場に居合わせた日本人の亀山薫さんかめやまかおるが勇敢に立ち向かい、子供達を守りました。現地の捕獲部隊が到着した時には亀山さんは右腕に大怪我を負っていました。サルウィンに休暇で旅行していたロンドン総合病院のチャールズ・スコット医師がすぐに手当てを行いました。出血量が多く一昨日の最終便でロンドン総合病院に運ばれ、10時間に及ぶ大手術の結果、無事成功しました。」

そこでキャスターが読み上げたのは、特命係の尊の前の右京の相棒、亀山薫の名前だった。

右京はティーカップをテーブルに置くと、素早くスーツと帽子を身に着けて個室を出て行き、尊達は慌ててを追いかけた。

右京はやはりスコットランドヤードが貸し出したパトカーに乗り込むと、ホテルを後にした。

車は全然走っておらず、ロンドン総合病院に到着するのは1時間も

かからなかった。

全速力で階段を駆け上がり、病院中を駆け回って薫の病室を探したプレートに「Kaoru Kameyama」と書かれている個室を見つけたのは3階の階段を駆け上がってすぐだった。

ドアを開けると、目を瞑っている薫の横で俯いている女性、薫の妻の美和子^{みわこ}が顔を上げた。

右京の顔を見ると、美和子の目に涙が溢れ出した。

美和子

「右京さん…っ！」

右京

「美和子さん、亀山君は…。」

美和子

「腕を虎に噛まれて…すぐに手当てをしたんだけど、今からロンドンに運んで手術をしないと助からないって…！」

涙をばろばろ零しながら説明をする美和子に右京は「大丈夫です。手術は成功したんです。目を覚ましてくれますよ。」と静かに言った。

美和子は涙を拭いて顔を上げた。

美和子

「あの…あなたは？」

美和子は、尊に向かって問いかけた。

尊

「警視庁特命係、現在杉下警部の相棒をしている神戸尊です。お会いできて光栄です。」

尊は深々と解釈した。

伊丹

「美和子さん。と…失礼、亀山は、手術が終わってどの暗い眠ったままなんですか？」

伊丹が美和子をさん付けで呼び、敬語で話すのは珍しいことだった。薫が特命係に配属されていた時期に、伊丹は必ず「特命係の亀山」と呼んでいた。薫が特命係に配属されるのを嫌っているのを承知しているにもかかわらずだ。

そして美和子が薫と結婚して以来、美和子に対しては「亀子」「亀山婦人」などの大人気ない呼び方をしていた（逆に薫からは「タタミ」、美和子からは「いやみ」と呼ばれたこともあるが）。

美和子

「昨日の夜中の12時にロンドンについて、1時から手術が始まって…11時に終わったから20時間…。」

右京

「そうですか…。」

ベッドに横たわる薫の右腕には包帯が何重にも巻かれている。

美和子

「全治2ヶ月だそうです。ちょっと、外の空気を吸ってきてもいい

ですか？」

右京

「ご一緒してよろしいですか？」

美和子

「ええ。どうぞ。」

薫の事を尊達に任せ、病院の裏庭に右京と美和子は出た。

右京

「サルウィンでの生活はどうでしたか？」

美和子

「薫ちゃんも、毎日子供達とお話して、元気に遊んであげて、すごく楽しい毎日でした。」

右京

「そうですか…。」

美和子

「たまに、右京さんやたまきさんどうしてるのかなって言うたりするんです。」

たまきと言うのは右京の元妻宮部たまきみやへの事である。

彼女が切り盛りする小料理屋「花の里」は右京や尊が仕事帰りに良く寄っている。

それは、薫や美和子も同じであつた。

右京

「花の里は…もう閉店しています。」

美和子

「え…？」

右京

「たまきさんは日本や世界各地を旅したいとおっしゃっていました。」

運がよければ、再会出来るかもしれませんよ。」

美和子

「そうだと良いですね…。」

右京

「それはそうと、手術が終わってからずっと個室にいたんですか？」

美和子

「はい。たまにお手洗に行く位で…シャワールームは病室にありましたから。」

右京

「だとしたら、お腹が空いていませんか？」

美和子

「あ…そういわれれば…。」

右京

「何か食べませんか？僕も朝食の途中で亀山君のニョースを見たもので…。」

美和子

「わざわざ来てくれて…本当にありがとうございます。」

美和子は深々と頭を下げた。

病院の売店でサンドイッチのリングジューズを買い、ベンチに座って包みを開けた。

美和子

「そつえば、なんで右京さん達はロンドンに？」

右京

「古い友人から手紙をいただきましたね。米沢さんや伊丹さんや、角田課長達も来てくれました。」

美和子

「なんで伊丹さんまで…。」

右京

「伊丹刑事のことが嫌いですか？」

美和子

「嫌いじゃありませんけど、散々嫌味を言ってたのに今日に限って

「美和子さん」ですって。」

右京

「さすがにこの状況で大人気ない発言をするほど無神経な警察官ではありませんよ。亀山君が警察を辞めるときも、嫌味を言いながらちゃんと見送りましたからね。」

その頃、病室では伊丹が背中に手を伸ばしていた。

伊丹

「背中が…痒い…。」

三浦

「誰かが噂してるんだろう。」

伊丹

「誰が…。」

その時、薫の目がゆっくりと開いた。

尊

「気がつきましたか？」

三浦

「何!？」

伊丹達がベッドに駆け寄る。

薫

「…あなた…誰？」

尊

「神戸尊と申します。特命係で、杉下警部と一緒に仕事をさせていただきます。」

薫

「…右京さんの…。」

伊丹

「おい、亀山！！」

薫

「…伊丹…三浦さん…芹沢…。」

ゆっくりと左手を伸ばした。
痛みがそれをしっかりと掴んだ。

伊丹

「亀山…分かるのか…俺たちが…。」

薫

「…ああ…。」

角田

「お、おい！誰か警部と奥さん呼んで来い！！」

米沢

「は、はい！！」

米沢が右京と美和子を連れて戻ってきたのは5分ほど経過してからだった。

美和子が伊丹を押しつけて薫の手を握る。

美和子

「薫ちゃん…薫ちゃん…」

薫

「美和子…心配かけてすまなかったな…」

右京は黙って薫と美和子を眺めていた。

薫

「…あ、右京…さん…」

右京

「亀山君。」

右京もベッドに駆け寄った。

右京

「久しぶりですね。亀山君。」

右京も涙を流していた。

その頃、ヒースロー空港に到着した飛行機から一人の男が降りてきた。

「へえ…ここがロンドンか。杉下さんとソン君はどこかな？」

その男はタクシーでとりあえずロンドンに行く事にした。

緒マジ頃、ロンドン学会会場。

レイトン

「この3000万年前に栄えていたかも知れないと言う文明の謎を、私の手で解明したいです。」

レイトンの講演が終わり、拍手が起こる。

それを影から見つめている人物がいた。

派手なマントと帽子を身につけ、顔の上半分を白いマスクで隠しているその男は、不敵な笑みを浮かべた。

「エルシャール・レイトン…そして杉下右京…まさか知り合いだったとはな。」

「だんな様、わざわざ敵を呼び寄せてよかったのですか？」

スーツの老人がマスクの紳士に尋ねた。

「ショーにはたくさんの観客を招いたほうが面白いだろう。彼らはスペシャルゲスト…さ。」

男はレイトンを眺め、大きな声で笑った。

しかしそれは学会に集まった人々の拍手や歓声に打ち消され、レイトンの耳に入ることは無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5968x/>

レイトン教授vs相棒～考古学者と特命係のナゾトキ事件簿～

2011年11月20日21時41分発行